

東京文化資源
会議

Tokyo Cultural Heritage Alliance

「ティーチャ」

T-Cha

東京文化資源会議

ニューズレター

No.2

Shigeru Ito



都市の 未来を描く、 実践者の手 伊藤滋

御年86歳。しゃんと伸びた背筋と
きらりと光る眼差しで、常にスケッ
チブックと原稿用紙を片手に、論文
や報告書を描き続ける。東京文化資
源会議の会長であり、都市計画家と
して長年活動をしてきた伊藤滋先生
都市計画におけるマクロな視点から
の問題提起にとどまらず、それらを
実践していくための提言や、東京文
化資源会議のように周囲の人を巻き
込みながら実際に形にしていくな
プロジェクトマネジメントの2つの視
座を行き来する精力的な活動には目
を見張るばかり。その根底には「理
屈だけでなく、実践を伴うことが必
要だ」という伊藤先生の理念が見て
取れます。

著書『たたかう東京』から『す
みたい東京』と続くシリーズは、東京
の未来都市に向けた提言をまとめあ
げたもの。『たたかう東京』では、
国際居住区の提案や羽田空港第六滑
走路の整備など、世界都市・東京に
向けた都市計画を提言。『すみ
たい東京』では、将来の人口予測とも
に東京内の居住空間の改善、空家問
題の解決策、東京駅建て替えの際に

NEXT PAGE

適用された「特例容積率適用地区制度」(註) などについてまとめています。いずれも今後の都市において、それぞれの個性を活かすまちづくりのための実践的な提案内容となっております。

都市計画によって

つくられた「川」

——「川向こう」に

寄り添うこと

「中野で生まれ、杉並で育った自分は、どんなインテリやお金持ちよりも下町のおばさんが付き合いたい」と話す伊藤先生。早稲田大学、東京大学を経て華々しく活動する傍ら、墨田区や荒川区などの下町地域におけるまちづくりにも継続的に携わるなど、住民との長年の親交を続けていたそうです。



「1979年からの鈴木俊一都知事時代に進められた都庁移転の際には、大都会・新宿ではなく下町地域である東京の東側に都庁を置くべきという論文を出した。都民を支える機能のある都庁こそ、そのサポートを必要とする住民が多く住まう場所にあるべきなんだ」

かつて都会者が田舎者を嘲る差別的な意味で使われた「川向こう」という表現は、江戸時代における都市計画によって作られました。まちの中心をどこに置くか次第で都会/田舎の線引きや「川」の位置は変わってくるもの。だからこそ、都庁移転時における伊藤先生の論文は、生活福祉を受給する人たち、市井の人たち、山の手だけではない下町の人たちも含め、人の暮らしに寄り添った都市計画を考えなければならぬという伊藤先生の考えがあります。

「自分は北海道の出身でね。尾張藩の足軽だった先祖が、中央の命令で、蝦夷の開拓地に連れていかれた。いまでいう難民みたいなものかな。その

せいか、王道に対して、批判的な思いがある。長いものに巻かれるんじやなく、常に市井の人たちの暮らしと向き合おうべきだと思うし、自分にはそれが性に合っているんだよ」

人間の身体感覚を伴った
都市計画を目指して

東京大学大学院工学系研究科にて工学博士課程を修了した伊藤先生の建築人生の始まりは、住宅設計でした。住宅設計における基礎が、自身の、身体的で人間的なスケール感を養った経験だったと話してくれました。

「住宅は、人の生活そのものを映し出してくれる。住宅設計で描く50分の1の図面は、絨毯の大きさや畳の縁、廊下の幅等の寸法を精密に描かなければ、住宅として成り立たないんだ。数センチの差で暮らしの様子が大きく変わってくるからね。当時は、大工と一緒に20分の1の精密な図面をもとに窓枠を作ったりもしたよ。日常の何気ない寸法をすべて把握していないと建築なんてもんじゃない。人間のスケールとそのディ



事なんだ」

住宅設計における緻密さから人間の距離感や身体的な空間のあり方を理解しながら、同時に、巨大な都市計画に必要な俯瞰した目も持つ。「住宅設計に必要な20分の1と



50分の1の図面、そして敷地や庭まわりを計画する100分の1、最後に都市計画に求められる200分の1の図面。それぞれのスケールが僕の頭の中には入っている。それが工学部出身の建築家の存在意義だ」と伊藤先生は話します。

都市計画もすべては図面から始まる。大胆な発想だけでなく、身体感覚を軸にした細やかな視点こそ伊藤先生の真骨頂。それらはすべて長年の実践経験から培われたものです。だからこそ、伊藤先生の提言するものには夢想到達しない、現実を変えうる力があるのです。

そんな伊藤先生から、これからの若い世代に一言。

「批評や評論はいらぬ。小さくてもいいから、まずは何かを作るんだ。そのためには、手を動かして図面を描くことでは始まらない。図面を描けば細かな部分に気がつき、次第に必要なものが見えてくるはずだ」手を動かすことに最後までこだわり、実践から次なる一歩を見出す。それこそが伊藤イズムなのです。

小さな実践から
大きな運動体へ

東京文化資源会議が始まってから今年で3年目。これまでに数多くのプロジェクトが立ち上がっています。それらのすべてが、手を動かし足を動かしながら次の課題を模索する、まさに実践的な活動です。まちの文化資源を活用しながら、同時に、これからのまちのあり方を追求する、その活動領域や幅はますます広がりを見せています。

各プロジェクトの一つひとつは小さくても、それらが一つの運動体として重なることで、大きなうねりとなって東京という都市の景色を着実に変えようとしています。小さな一歩、小さな一手が重なることで、東京という大きな街を変える波を起こす運動体になりつつあります。これが、東京文化資源会議の現在の姿です。伊藤先生が語る身体感覚を伴った都市計画をもとに、今後も様々なプロジェクトを生みだしてまいります。

(聞き手：永松繁隆 記事構成：江口晋太郎)

註：東京駅建て替えの際、駅の余った容積を三愛地所等の丸の内側の地区に売却し、丸の内駅舎の建設資金を捻出した。特例容積率適用地区制度」を例に、容積移転を普及させるために区を単位とした小規模容積移転を実現させる「容積適正配分型地区計画」の提案など、具体的かつ都市におけるそれぞれの個性を活かすまちづくりを可能にする実践的な内容となっております。

T-Cha NOW TOKYO PROJECT

東京文化資源会議では、産官学民の様々な分野の専門家や実践者が集い、各地域で育まれている文化資源をハード・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。ここでは、東京文化資源会議全体の動向や各プロジェクトの近況をお知らせします。



スローモビリティから新しい都市生活像を考える

TOKYO TRAM TOWN 構想は、東京文化資源区域内を走る「スローな交通手段とシステム」の導入検討プロジェクトです。その目的は新しいモビリティのデザインではなく、文化資源区だからこそできるスローモビリティによる「新しい都市生活像・都市文化のデザイン」。これまで何度も検討会を重ねて生まれた「都市環境」「生活文化」「経済価値」のキーワードをもとに、どのような文化体験や経済活動を生み出せるかを議論しています。9月28日のラウンドテーブル開催を経て、今後はグランドビジョンの策定や具体的なプランに落とし込むケーススタディや各種リサーチ、フィールドワークを実施。成熟したこれからの都市に対する問題提起と価値の提示を行っています。



写真・内田昂司

地域の活動を推進するデジタルアーカイブの役割

地域の活動を継続・発展させていくために、デジタルアーカイブの手法がどのように活用できるのか。地域の文化資源をデジタル技術と接続し、エコシステムを構築するためのプロジェクトです。すでにパイロットプロジェクトとして地域雑誌『谷根千』のデジタルアーカイブを行っています。11月24日に開催されたイベントでは、谷根千を対象とした地域文化資源デジタルアーカイブのこれまでの活動の中間発表や今後の可能性について討論。今後の展開として、地図のマッピング等のアプリケーションをはじめ、どのような活用ができるのかを検討していきます。

地域の新たなスポーツ文化資源を発掘していく

スポーツ文化資源部会は、東京文化資源区に散在するスポーツ文化資源を結びつけ、地域にあるスポーツ文化を育み、スポーツを地域の文化資源と捉え直すことで新たな価値を生み出すために活動しています。スポーツとアートをつなぎ、まちなかでスポーツを行い、多様な個性をもつ人の参加を促しながら、地域らしさを生み出すことを理念に、将来的にはオリンピックとパラリンピックをつなぐ第三の祭典「シビリンピック」開催を目指しています。10月28日にはみんなでスポーツ！企画を実施。車いす＆ブランドスポーツ体験やドッチビー等、誰もが楽しめる、変わったスポーツのイベントとなりました。今後は、他の文化資源会議プロジェクトとも連携していきながら、スポーツを軸とした様々な地域の文化資源調査を行っていきます。



次なる精神文化形成に取り組む

東京文化資源区にある、日本における近代精神文化形成に大きな役割を果たしてきた「杜社会堂」の建築や土地の履歴、地形を参照し、湯島天神、神田明神、湯島聖堂、東京復活大聖堂（ニコライ堂）関係者が集まり、様々な検討会を実施。湯島を中心とする学術文化施設とその文化資源を今後の日本社会のあり方を考えることを基礎に、現在は文化資源区内の杜社会堂に関する文化観光のパンフレット制作等の情報発信を行いながら、2020年を目前に、本プロジェクトの中核機関となる「湯島杜社会堂（仮称）」の設立を視野にいれながら活動しています。

リノベーションまちづくりの制度設計に向けた検討会

リノベーションまちづくり制度研究会は、地域における個性や魅力を高める歴史的建造物等の文化資源の保全・利活用を目指し、新たな制度設計に向けて議論を行っています。まちづくりファンド等の民間資金を投入する動機づけとなる仕組みの検討や、容積割増、税制優遇、法制度、財政基盤等のリノベーションまちづくりを推進する法制度体系・計画体系を推進していきます。今年度は主に、容積率移転または域外公共貢献による評価容積率割増等の外部から建物保全・利活用に関わる動機づけや、保全・利活用のコスト負担に応じたメリットの付与を検討テーマとし、2年間の議論を進めながら研究会の提言書をまとめていきます。



不忍池を中心とする文化資源を楽しむ公共空間

上野を中心とする公共空間戦略として、2016年から取り組んでいる上野スクエア構想。2017年は、庶民的中心である不忍池の回復を目指しながら、上野の街そのものの魅力向上に向けて検討会を進めています。11月8日に行われた第3回委員会では、出入り口や滞留調査の不忍池行動調査、大濠公園等の他の池空間の水際の空間づくりや街との境界デザインの調査発表を実施。池を中心に文化資源を楽しむ公共空間戦略を策定しながら、様々な視点から公共空間を楽しめるものにするための提案書を作成しています。これらを踏まえながら、現状と提案を見比べながら議論する「まちあるき」企画や道路管理者や公園管理者へのヒアリングを実施しながら、ハード面ならずソフト面も含めた提案の可能性を検討しています。



各プロジェクトの今を知る！

東京文化資源会議「活動報告の夕べ」が 開催されました



東京文化資源会議は今年で3年目。プロジェクトの数も10を超え、来年はさらなるプロジェクトの組成も見込まれています。そうした活発な動きがある一方、これらのプロジェクトの詳細をきちんとお伝えする場を作り、それぞれのプロジェクトの支援体制を整えていかなければなりません。そこで「東京文化資源会議、各プロジェクトの今を総ざらい！活動報告の夕べ」と題したイベントを11月27日に開催し、会員の方々80名以上にお集まりいただきました。イベントでは、各プロジェクトリーダーがコンセプトや目的、現在の状況、今後の展開等を発表。短い時間ながら、端的な内容の中を丁寧にプレゼンし、時には会場から笑いも起こる和やかな時間が流れました。

イベント後半は、プロジェクトの内容がひと目で分かるパネルをもとに、プロジェクトメンバーが会員の方と交流しながら、プロジェクトの詳細や今後について対話。東京文化資源区の未来について、盛大に語り合う貴重な場となりました。報告会をきっかけに、プロジェクトの詳細を理解した方や「ぜひ連携してプロジェクトを進めたい」と語ってくれた方も多く、参加者それぞれにとって有意義な時間となりました。

今後も、東京文化資源会議では各プロジェクトと会員の方との交流や連携を図る機会を作りながら、東京文化資源会議に関わる皆さまと共にこれからの東京の未来、文化資源区の未来を築いてまいります。

編集後記

会議の様々な活動を皆さまにお伝えする趣旨で始まったこのニューズレター。ニューズレターと合わせて広報の両輪の一つとして開催された活動報告の夕べ。多くの皆さまにお集まりいただきました。私は地図ファブPPTの発表と対応で手一杯でしたが、楽しめたでしょうか。今後も各PPTの活動に注目していきたいです。(陸)

活動報告の夕べの司会、報告の合間にいい感じのツツコミで場を盛り上げたかったんですが、力量不足を反省。報告のポケでひと笑い、司会のツツコミでもうひと笑いが理想。ポケが咀嚼しきれず慌てる始末。Mリーグランプリを見て来年の出直しを誓いました。(なが)

3年目とは思えないくらい、数多くのプロジェクトが立ち上がっています。それだけ東京の未来、都市の未来について思い、行動する人がいることを報告会を通じて実感しました。まずは手を動かすことが大事だという伊藤先生の力強い言葉に、プロジェクトの面々も背中をぐっと押されたような気がします。(江)

きーんと澄みきった朝の空気は、寒さで縮こまった背筋をしゃんと伸ばしてくれますね。社寺会堂が点在する東京文化資源区はこの季節、とりわけ賑わいを見せます。ぜひ足を運んでみてください。今年もお世話になりました。皆さま良いお年を。(雅)

[ティーチャ]東京文化資源会議ニューズレター No.2

深み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会 デザイン：渋井史生(PANKEY inc.) 執筆：江口晋太郎(TOKYObeta Ltd.)

写真：鈴木渉、加藤甫 印刷・製本：スターツ出版株式会社 発行人：東京文化資源会議 発行日：2017年12月30日

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-1 TEL：03-5244-5450 FAX：03-5244-5452 MAIL：info@tohun.jp URL：http://tohun.jp/

T-Cha

T-Cha